

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21510259

研究課題名（和文） 経済的・文化的資源としての民族文化観光の可能性：ケニアの「マサイ」を事例として

研究課題名（英文） Exploring the Possibility of the “Maasai” Cultural Tourism as the Economic and Cultural Resources

研究代表者 中村 香子 (Nakamura Kyoko)

京都大学・アフリカ地域研究資料センター・研究員

研究者番号：60467420

研究成果の概要（和文）：

本研究は、民族文化観光が、ホストである地元の人びとにとって、どのような経済的資源・文化的資源となっているのかを解明し、地域社会の開発＝発展のために民族文化観光が果たする役割を探究することを目指している。本研究では、アフリカの「マサイ」を事例に、現地の人びとがみずからの「伝統的な文化」（ダンス、儀礼、装身具、衣装、家屋など）を外国人観光客に提供する民族文化観光が、地元の人びとの経済を支え、自文化に対する誇りを高めるために果たする役割に関する情報基盤を提出する。

研究成果の概要（英文）：

This study elucidated what kind of impacts the cultural tourism gives on the economic infrastructure and the cultural identity of the local communities. The cultural tourism provides the opportunities to the “Maasai” people of Kenya to “sell” their “traditional” culture, such as dances, ceremonies, and attires, to the tourists. The study is also to explore the possibility of the role of the cultural tourism as the cultural and economic resources for the local people.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：地域研究

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：イメージ、ダンス、人類学、移動労働、装身具、観光開発

1. 研究開始当初の背景

ケニアにおいて「マサイ」として観光業についている人びとは、実際にはマーサイ（Maasai）だけではなく、サンプルやトゥルカナなど、ケニアの北部の乾燥地域で牧畜を

いとなんできたさまざまな民族を含んでいる。この人びとをとりまく自然的・社会的環境は、この2～30年のあいだに劇的に変化してきた。温暖化などの影響によって厳しい旱魃の頻度が高くなり、家畜数が激減する一方

で、開発援助によって医療サービスへのアクセスが容易になり人口は急増した。その結果、一人あたりの家畜の頭数は減少し、牧畜だけで生計をたてていくことが困難になり、賃金労働への参与などによって収入源の多角化が模索されている。なかでも都市や観光地への移動労働の重要性が増しており (May, 2002)、民族文化観光もその一つである。

民族文化観光に関する従来の人類学的な研究では、カネをもち「見たいものだけを見る」観光客と、それを受け入れるしかない地元の住民のあいだには、権力の不均衡が存在することが「観光のまなざし論」(アーリ 1989) などによって指摘されてきた。これに対して「文化の客体化論」(太田 1993) は、観光客の「まなざし」を意識して地元民がおこなう「演出」を自己の文化に対する誇りを構築する「主体的で創造的な営み」としてとらえ、権力構造を中和する可能性を指摘して注目された。しかしながらこうした人類学的な議論は、民族文化観光の不均衡な権力構造に関心を集中させてきたため、民族文化観光が豊かな経済的・文化的資源となりうる可能性を建設的に論じる余地を排除する結果をまねいている。

一方、東アフリカの牧畜社会において民族文化観光は重要な収入源のひとつとなっており、「マサイ」をめぐる民族文化観光にまつわる諸現象を、収入などの経済的側面だけではなく、人びとのアイデンティティや自己への誇りといった感情をふくむ文化的側面をも含めた、包括的な地域研究の視点から解明し、その成果を開発支援に活用できる情報基盤として検討する必要があると考えるにいたった。

2. 研究の目的

ケニアの民族文化観光は、おもに首都であるナイロビとモンバサを中心とするインド洋沿いの「ビーチ・リゾート」でおこなわれている。本研究では、民族文化観光がもっとも活発なモンバサを主たる調査地とし「マサイ」と呼ばれる諸民族全体を対象に以下の項目について解明することを目的とした。

1) 民族文化観光の全体像を把握

民族文化観光にかかわる「マサイ」と自称する人びとについてその背景(民族、性、年齢、仕事、出稼ぎ期間など)、および彼らを取りまくさまざまなアクターを把握し、それぞれの属性と相互の関係性を明らかにすることにより、モンバサ周辺でおこなわれている民族文化観光の全体像を描く。

2) 民族文化観光を経済的資源として分析

観光ホテルなどで「マサイ・ダンス・ショー」に出演し、「マサイ」の装身具を販売す

るといった民族文化観光から「マサイ」たちが得ている収益を明らかにする。ダンス・ショーに関しては、観光ホテルや旅行会社の収益とダンサー個人の収益、また、装身具販売に関しては、「マサイ」が直接に観光客に販売するときの収益と土産物店を介して販売する場合の収益などを詳細に明らかにする。また、モンバサ周辺に出稼ぎに来ている「マサイ」世帯の収支をその人口構成とともに明らかにする。さらに、民族文化観光に従事する「マサイ」が故郷に対しておこなっている仕送りの現状を明らかにし、民族文化観光による収入が、故郷の牧畜経済全体の中でのどのような位置を占めているのかを分析する。

3) 民族文化観光を文化的資源として分析
民族文化観光の場面で「商品」として供されるダンスや装身具は、観光客が「マサイ」に対して抱く「イメージ」(「野生」「未開」「戦闘的」など)をつよく反映していると同時に、民族文化観光は、こうしたステレオタイプを再生産する装置として機能していると考えられる。本研究では、こうした現状は変更されるべきであるという問題意識のもとに、観光客に対して「商品」として提示されているダンスと装身具は、故郷のものどどのように異なるのか、どのような工夫や改変がほどこされているのか、また、観光客はどのような「マサイ」イメージをもち、彼らに何を期待しているのか、そのイメージは歴史的にどのように構築されてきたのか、さらに、「マサイ」自身は観光客に対してどのような「白人」イメージをもち、それとの関連において自分たちの文化的な実践(ダンスや装身具など)を、どのように認識しているのかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、申請者の中村と連携研究者のホルツマン(ウエスタン・ミシガン大学)との共同研究として実施した。二人はともにケニアにおいてサンプルの調査研究に従事してきたが、ホルツマンが経済的側面に注目してきたのに対して、中村は社会的・文化的側面に関する研究をおこなっている。本研究では、両者の協力体制によって民族文化観光に関する包括的な分析を試みた。現地調査は、ケニアのビーチ・リゾート、モンバサ、および、モンバサからの仕送りが送られる先の故郷(モンバサから800キロ離れたサンプル県)においても実施した。また、観光客のもつ「マサイ」のイメージがどのような歴史的な背景のもとに構築され、現在に至るのかを文献と現地調査により明らかにした。

4. 研究成果

(1) 「マサイ」をめぐる民族文化観光にか

かわるさまざまなアクターには、観光業者、土産物店、観光客に販売される装身具の販売者と制作者、リゾート・ホテルや「民族村」の経営者と従業員、ビーチを管理する行政、「マサイ」の家族たち、ローカルNGOなどが存在していた。それらの相互の関係性を把握し、民族文化観光の全体像を明らかにした。また、「マサイ」として観光業に携わっていた人びと約100人をランダムに選択し、彼らを対象に、民族、出身地域、クラン、年齢、滞在期間、滞在場所、過去の出稼ぎ経験、仕事内容、収入、学歴、英語などの外国語能力などについて聞き取り調査を実施した。約9割が男性で20～30代の若者であった。また、学校教育経験の有無と観光業への従事には相関がみられなかった。観光業には言語能力が必須であるが、学校教育を受けていない人びとも、長期にわたる観光業経験のなかで、観光客などとのインタラクションを通じてスワヒリ語や英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ヘブライ語などを身につけていた。

(2) ホテルなどの施設がダンス・ショーで徴収している入場料、入場者数、および「マサイ」ダンサーの給与、各人の出場回数と収入などを聞き取りと観察により明らかにし、また、土産物として製作・販売されている「マサイの装身具」について、その製作者と製作方法、また、販売者と収益についても明らかにした。これらの調査から、「マサイ」の多くは、ダンス・ショーにおいては、とても低賃金（もしくは無償）で仕事をしており、ホテル側の搾取とも呼びうる実態が見え隠れする一方、ダンス・ショーにともなっていくる装身具の販売では、実際には「マサイ」ではない民族がつくったものを購入して、それを「マサイの装身具」として観光客に販売するという「マサイ」側のしたたかな姿も明らかになった。

(3) 観光客のもっている「マサイ・イメージ」が「マサイ」をめぐる民族文化観光で提供されるショーや土産物につよく影響を与えている。「野生的な」「美しき戦士」、伝統的な人びと、「暴力的な」民族、など、「マサイ」にまつわる表象は、「他者」への憧れと恐怖を同時に包含しつつ、過去100年、ほぼ変化していないことが文献調査により明らかになった。そして、現在では、「マサイ」自身も欧米人のもつこうしたイメージを十分に意識しており、観光の文脈ではそれが経済的な価値をもつことも承知していた。その上で、積極的に自らを「野生的」で「美しい戦士」として演出することをとおして、ただでさえ、ケニアの他の民族よりも知名度の高い彼らは、観光客の注目を集め、写真を撮ら

れることによりチップをもらうなどといった、金銭的な報酬をより多く得ることも多かった。

「マサイ・イメージ」について、観光地と首都ナイロビに出稼ぎに来ていた人びと、また、故郷サンプルにおいても、広く聞き取り調査を行った結果、こうした外部のイメージは、故郷サンプルから離れた経験のない人のあいだにも、つよく意識されていた。そして、ひとりの人が、このイメージを肯定的にとらえることもあれば、反発することもあり、固定化されたイメージに対する、彼らのアンビバレントな感情が確認できた。いずれにしても、イメージは、民族のアイデンティティと分かちがたく結びついていることが明らかになった。

(4) 観光地モンバサには、サンプルの自助グループが存在しており、このグループの詳細についての調査を実施した。自助グループは、海岸のリゾート地一帯（モンバサ、マリンディ、ワタム）で出稼ぎ労働をしているサンプルのあいだで、1990年代の終わりに成立していたが、一部のメンバーによる資金の不正使用などにより、実質的には機能していなかった。しかし、調査時にはグループの世代交代がはかられ、再度このグループを機能させようという動きがみられた。この背景には、人びとのあいだの、観光地での仕事に経済的意味をつよく求めるという意識が顕著であった。ダンスショーと装身具販売による収入の一部をグループが徴収し、病気や故郷における不幸などで帰郷するものには支援を実施していた。この自助グループの成立の歴史、メンバーの変遷、1ヶ月の収益と支出、過去2年について資金援助をした事例、しなかった事例を聞き取りにより収集し、このグループが、民族文化観光が経済的基盤として機能するために果たしている役割を分析した。

(5) 最終年度には、連携研究者および関係分野の研究者とともに研究会（アメリカ、11月）を実施し、調査結果をもとに民族文化観光に関する包括的な分析を実施した。民族文化観光に従事することは、「マサイ」の人びとにとって、経済的にも文化的にも、重要度が増しているが、ケニアにおける観光業が、国際的なさまざまな事象、とくにテロリズムや大統領選挙などによりケニアの治安が不安定であり、ひとたび悪化すれば数ヶ月にわたって観光客は激減する。また主たる生業である牧畜業も、干ばつの長期化、狂牛病などの疫病とその風評被害などに影響されやすく、両者を柔軟に効率よく組み合わせることが大きな課題である。

しかしながら、出稼ぎ先と故郷との物理的な距離（800キロ、移動には片道2日、交通

費片道 2000 シリング=約 2500~3000 円が必要)にくわえ、気候、食生活、居住空間、金銭に対する感覚、など、ライフスタイルの相違が大きく、ふたつの生活世界をうまく渡り歩くことは容易なことではない。

観光業にたずさわりはじめた当初、「マサイ」の多くの人びとにとって、観光客や高級リゾートホテルなど、観光のセッティングがつくりだす西欧世界は、つよい興味の対象であり、経済的な収入を得るといった目的以上に、西欧世界を経験することが民族文化観光へと人びとを向かわせるモチベーションとなっているケースも少なくなかった。しかし、今日では、観光業の経済的な重要性を人びとはよりつよく認識している。そして、観光業を経済的な基盤とするためには、観光の場で提供するダンスや土産物の質を高めていこうとする意欲につながっており、ダンスに参加する人びとは、かつては、ショーをおこなっているホテルのマネジメントの指示に従って、単なる故郷の「真似事」としてのダンスショーを「こなす」という態度であったが、現在は「パフォーマンス」としてのダンスショーを「創り上げる」、という方向に意識を変え、観光客が喜ぶショーづくりのための話し合いを重ねるといった自主的な動きが見られた。また、その際には、観光客のイメージする「マサイ」を演じることも積極的に行う。これによって、「マサイ」は、観光客にとっても、ケニア国内の他の民族にとっても独特の存在であり続けており、こうしたことが、彼らの民族としての「誇り」に関与していることは否定しがたく、民族のアイデンティティとつよく結びついている。そうであるとすれば、どこからどこまでが、「パフォーマンス」で、どこからが「本当のマサイ」なのかという境界は極めてあいまいであると言えるだろう。民族文化観光が、経済的な重要度を増すのと同時に、民族としてのアイデンティティを再構築するステージを提供しており、民族文化観光の場での彼らが何を創りだし、何を得ているのかに注目し続けることの重要性が確認された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① Nakamura, Kyoko 2011 "Representation of the Maasai by the Maasai: Information Sharing between Scholars and Local People" *Nilo-Ethiopian Studies* No.13, *Journal of the Japan Association for Nile-Ethiopian Studies* 15 pp.11-21. 査読有
- ② Holtzman, Jon 2010 "Remembering Bad Cooks: Sensuality, Memory, Personhood"

Senses and Society 5(2):235-243. 査読有

- ③ 中村香子 2010 「牧畜民サンプルの割礼をめぐる新しい選択肢」『JANES ニュースレター』18, 日本ナイル・エチオピア学会 pp22-25. 査読有

[学会発表] (計 9 件)

- ① Nakamura, Kyoko "Masculine Image and 'Warrior Identities' of the Samburu in Northern Kenya" 第 110 回アメリカ人類学会 モントリオール・コンベンションセンター 2011 年 11 月 17 日
- ② Holtzman, Jon "Glocalization in the Barrel of a Gun" AAA (American Anthropological Association) Annual Meetings, Montreal, Canada, November 17 2011.
- ③ Holtzman, Jon "Bad Friends and Good Enemies: Constructions of Peace and Violence in the Samburu-Pokot-Turkana Triad" Kyoto University, July 2011.
- ④ Holtzman, Jon "The Thinness of Bulls" European Conference on African Studies, July 2011.
- ⑤ 中村香子 「『伝統』のダイナミズム〜ケニアのサンプル社会における「戦士(モラン)」を事例に」第 45 回日本文化人類学会研究大会 法政大学 2011 年 6 月 12 日
- ⑥ 中村香子 「「スルメレイ」という選択〜ケニアの牧畜民サンプルの女性による新たな年齢範疇の創出〜」第 16 回生態人類学会研究大会 京都大学 2011 年 3 月 18 日
- ⑦ Holtzman, Jon "Memory and Forgetting in Samburu-Kikuyu Violence" Symposium "Emerging Perspectives on Interethnic Violence" Kyoto University, July 30 2010.
- ⑧ Kyoko Nakamura "Historical Changes and Recent Trends in Beaded Adornments of East African Pastoralists: Globalization in One of the 'Traditional' African Art" The Roundtable on Communities and Cultural Heritage Centers in East Africa, Addis Ababa, Ethiopia, November 2009.
- ⑨ 中村香子 「性・年齢・経験による情報の価値の多様性: サンプルの事例から」第 18 回日本ナイル・エチオピア学会学術大会・公開シンポジウム『地域住民との研究資源の情報共有化に向けた課題を考えるー現地語とデジタル・メディアを中心として』総合地球環境学研究所 2009 年 4 月 25 日

[図書] (計 2 件)

- ① 中村香子 2011 『ケニア・サンプル社会における年齢体系の変容動態に関する研究ー青年期にみられる集団性とその個人化に注目してー』松香堂書店

② Holtzman, Jon 2009 *Uncertain Tastes: Memory, Ambivalence and the Politics of Eating in Samburu, Northern Kenya*. University of California Press.

〔その他〕

アウトリーチ活動、招待講演

京都精華大学公開講座「GARDEN」「アフリカン・ファッションービーズ装飾」(中村香子) 2009年12月

京都大学アフリカ地域研究資料センター公開講座「アフリカ研究最前線解る・アフリカ」「ビーズ装飾の最前線：東アフリカの牧畜民マーサイ、サンプルを事例に」(中村香子) 2009年12月

京都府視覚障がい者協会西京支部成人勉強会「いまを生きるマサイ」(中村香子) 2011年12月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 香子 (Nakamura Kyoko)

京都大学アフリカ地域研究資料センター・研究員

研究者番号：60467420

(2) 研究分担者

なし

()

(3) 研究協力者

ジョン・ホルツマン (Jon Holtzman)

ウエスタン・ミシガン大学・准教授

研究者番号：なし